カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り

高見大司教は、「この祈りは毎日あるいは折に触れて年中唱えてほしい祈り」だとし、「地球環境が傷つき痛んでいることに気づき、その痛みを自分自身の苦しみとし、一人ひとりがそれについてできることを見つけ、実践するようにしましょう（回勅『ラウダート・シ』9番参照）」と呼びかけている。

司祭助祭叙階式

わたしがあなたと共にいる

使徒言行録18・9－10

福音書に献香する稲田祐馬師㊤、呼び出しを待つ鼈甲屋賢治師㊦

10月11日（日）午後3時、〝コロナ禍〟の中、司祭助祭叙階式ミサが浦上教会で行われ、長崎教区に今年二度目の叙階の恵みが与えられた。八幡町教会出身のシモン稲田祐馬師が司祭に、宝亀小教区中野教会出身のヨセフ鼈甲屋賢治神学生が助祭に叙階された。新型コロナウイルスの影響を考慮して参加制限があり、参列者は受階者の関係者と聖歌隊、司祭団76人を合わせて約4000人だったが、ミサは聖堂を熱気で包んだ。その様子は、インターネットを通じてライブ配信された（NagasakiCollegio でYouTube 検索）。

叙階式ミサに先立ち、稲田助祭を現場で温かく指導した福江教会主任の中村 満師が教話を行った。「二人の叙階の恵みは、長崎教区に未来があることの父なる神からの確かな約束と受けとめています。未来を担う子どもたちにもそのお裾分けがあるようにと願います。第2バチカン公会議が司祭の役務として教えることを二人が忠実に果たしていけるように、共に祈りましょう」と呼びかけた。

みことばの典礼の後、叙階の儀が行われる。助祭の務め、司祭の務めが高見三明大司教によってそれぞれの受階者に告げられ、諸聖人の取り次ぎを願うための連願を唱える。そして助祭の叙階のために大司教が按手し、聖別の祈りを唱え、新しい助祭が助祭団に加えられる。

続いて司祭の叙階のため、大司教が按手し、補佐司教と参列するすべての司祭が按手してから聖別の祈りが唱えられ、「主の平和」というあいさつで新しい司祭を司祭団に迎える。新司祭と交わす平和のあいさつは単なるあいさつを超えて、これからの長い道のり、喜びも苦難も、司祭団は共に分け合う覚悟であるとの意思表明でもある。叙階の儀を終えた新司祭・新助祭と共に、聖体祭儀が進められる。ミサの終わりには、新司祭が家族と会衆全員に祝福を与える。心温まる場面である。

高見大司教は叙階されたばかりの新司祭、新助祭に祝辞を述べ、家族、関係者へも感謝を述べた。また、後に続く召し出しにも期待をのぞかせた。

叙階式を無事終えて、八幡町教会の信徒、田川正里子さんは「八幡町教会出身の司祭の誕生は稲田神父様が初めてです。幼いころ八幡町教会におられ、大神学生の時戻ってこられました。コロナウイルスのため今日はいろいろな制限がある中での叙階式でしたが、教会みんなで応援していましたので、本当に感激、感動しました」と喜びを語った。

聖堂の表では「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる」（使18・9－10）と書かれた新司祭の叙階式記念カードが、喜びに湧く参加者一人ひとりの手に渡された。

稲田祐馬新司祭は、10月12日付で福江小教区助任司祭に着任。

初心に帰る――司祭の日

浦上教会で記念ミサ

10月12日（月）10時半から浦上教会で「司祭の日」を祝うミサがあり、約60人の司祭団が、参加した信徒らと共に祈りをささげた。「司祭の日」は本来は聖香油ミサ（長崎教区では今年は4月7日）のときに記念しているが、新型コロナウイルスによる影響でお祝いを延期し、今回日を改めて行われた。

高見三明大司教は説教の冒頭に「昨年から今年にかけて長崎教区はいろいろな意味で注目を浴び、周りの方々から励ましや慰めの言葉をいただいてきました。そういう中で私たちは今日、司祭職のお恵みを感謝し、必要な恵みを願うために集まりました」と語り、「私たちの弱さ、不忠実さ、罪深さを認め、へりくだって謙遜に神にゆるしを願うこと」と「神の恵みの働きに協力するという私たちの使命をもう一度思い起こし確認すること」の必要を述べ、最後に参加者に向けて司教・司祭のための祈りを求めた。

ミサの終わりに、今年司祭叙階から60年、50年、25年を迎えた司祭らと2人の新司祭（青田憲司師と稲田祐馬師）に花束と記念品が贈られた。

中村倫明補佐司教は司祭団を代表し、「叙階の年数を重ねるに従い、司牧と宣教の喜びだけでなく、ご苦労やはがゆさ、つらさ、後悔もあったかもしれません。（中略）アナムネーシス、想起する、記念の日を与えられるというのは、実は、初心に帰らせてもらうこと、大切な基本的なことに戻らせてもらうこと」と語り、節目を迎えた司祭らの健康を気遣い、祝いの言葉を送った。

成井大介新司教が誕生

新潟教区カテドラルで叙階式

9月22日（火）10時から新潟教区カテドラル新潟教会で、今年5月31日聖霊降臨の日に教皇フランシスコにより新潟教区司教に任命されたパウロ成井大介師の司教叙階式が行われた。

主司式は新潟教区が所属する東京教会管区の菊地 功大司教が務め、前田万葉枢機卿と、さいたま・名古屋・大阪・横浜・札幌・京都・広島の各教区から7人の司教、駐日教皇庁臨時代理大使ヴェチェスラヴ・トゥミル神父と仙台教区使徒座管理者の小松史朗神父が参加した。叙階式は、新型コロナウイルス感染症対策のため参列者の制限があったが、教区内の地区代表者らが参列し、またインターネットで中継も行われ、多くの人々が新司教誕生の喜びを分かち合った。

菊地司教は説教の中で、感染症の影響下にある教会について「わたしたちは、教会がどのような存在なのかをしっかりと見直す貴重な機会を与えられている」と述べ、2年半の司教座空位を経て今日を迎え、新潟教区一人ひとりの支えに対する感謝とともに「（共同体の先頭に立つ牧者を必要とする）この時期に新しい牧者を任命してくださった」教皇の配慮にも感謝の思いを語った。最後に成井司教に向けて「ゆだねられた群れ全体を愛し、養い、育て、守り、導いてください」と語った。

叙階式の終わりには、この日参加できなかった司教協議会会長の高見三明大司教からのお祝いの言葉が代読された。成井司教は、新潟教区の教区長、また使徒座管理者として16年間にわたり教区を導いた菊地大司教に謝意を表し、教区のすべての人々に向けて「ゆっくりと一歩一歩、福音の道を共に歩んでまいりましょう」と語った。

成井新司教は「誰でも、自分らしく福音を生き、互いの尊敬のうちに学び合い、協力していく共同体として歩んでいきたい」との願いをもって、モットーを「いつも ふくいんを ともに」としている。

津和野の証し人 37名の列聖調査 進む

2019年5月3日の津和野「乙女峠まつり」のミサの中で、広島教区の責任の下に、津和野の証し人37名の列聖調査を正式に開始する宣言がなされた。その後、「津和野の証し人列聖調査委員会」が同年6月11日に正式に立ち上げられ、その第一段階である列福のための申請書の中核となる歴史部門の推敲作業が進められてきた。

今年の2月には歴史部門の作業がほぼ終了し、3月から教皇庁の列聖省に提出するために英訳の作業が進められている。その後の手続きとして、37名を殉教者として列福してほしいという信者の声望の証言が少なくとも40名分必要である。そのために、列聖調査委員会は、おもに浦上キリシタンの流配先を中心に、東京、名古屋、和歌山、大阪、京都、金沢、岡山、長崎、広島に住む司教、司祭、修道者、信徒の協力を得て、証言の聞き取りを、この7月から10月にかけて実施した。

長崎大司教区における聞き取りは、9月24日と25日の両日に行われ、司教1名、司祭2名、修道者2名、信徒3名、合計8名が声望の証言に協力した。列聖省から送られてきた証言内容の事項は50項目を超え、一人の証言聞き取りには、1時間～1時間半かかった。

（広島教区司教　白浜 満）

ほしかげ

すべての死者のための祈り。信徒が熱心に聖堂内で唱えているのを聞きながら考えた。生きながら、すでに死んでいる状態も、「死」と呼べるかもしれない。そこには社会的な「死」があり、政治的な「死」もあるだろう。もはや生きる意味を失っているのだから、本当にかわいそうである▲さまざまな制裁によって「死」を味わった人は、どうすればこの世で再び生きる力を得られるだろうか。生活様式を変えただけで「生」を味わえる人はごくわずかで、もはやイエスによってしか、新しい生き方を与えられない人もきっといる▲もし誰かが、死んだような生き方をしているのなら、そこには宣教のチャンスが確かにある。その人はほかの誰によっても「生」を味わえないのであり、まだ見ぬイエス・キリストを待ち望んでいるのだから。こうした人を探すために、すべてのキリスト者は存在しているのではないか▲しかし単純に、「新しい生き方」のためイエスを必要としている人ばかりではない。これまでイエスを知らずに生きてきた人には当てはまるが、ひょっとしたらイエスに土台を置いて生きているはずの人が、死んだような生き方をしているならどうなるか？その人にイエス・キリストを示した時、本当に「新しい生き方」を得られるだろうか。このような人にどんな手を差し伸べればよいのだろうか。すべての死者のために祈りたい。（輝）

わたしたちが受けとったもの、伝えていくこと

教皇来崎からの始まり⑨

カトリックの価値を世に示すことができるのか？

飽の浦教会信徒　井手 義美

信徒としての在り方

私たちは日曜日にミサにあずかり、ときに教区の行事へも参加します。しかし、それが教会内または教区内で閉じてしまってはいなかったでしょうか？　もちろん、私たちは自分の信仰を他の人にひけらかすことには躊躇することでしょう。でも、宣教を目指すことは私たちにとって大切な使命であり、そのことは忘れ去っていいものではないと思います。

「宣教」は確かにあらゆる機会や組織、手段を通して試みられていることを否定するつもりはありません。しかしながら、私たちの信徒としての在り方を見て、カトリックの教えの素晴らしさを感じ取り、教会へ足を運んだ人がどれほどいたでしょうか。あるいは他の人を教会へお連れしたことがどれほどあったでしょうか。

私は今、カトリックのあるアメリカ人の方とインターネットでやり取りしていますが、彼もカトリックの現状に危機感を感じている一人のようです。私が、長崎での教会や教区の活性化について関心をもっていると伝えましたら、彼は現在、アフガンで国連の平和維持軍関係の仕事に従事していますが、任務を終え帰国したら、ハワイでカトリックの活性化について取り組んでみたいと意気込みを語りました。なぜハワイにおいてかというと、私が以前ハワイを訪れた時、そこの教会でのミサはほとんどお年寄りばかりだったと伝えたからです。

ハワイは観光地で事情が少し違うのかもしれませんが、どこであれ、働く意欲のある人にとっては問題は無いでしょう。彼がハワイで頑張るなら大いに期待したいし、彼は休暇を利用して一度長崎へ来てみたいと言っているので、こちらの教会を案内するほか、さらに意見交換してみたいものと思っているところです。

祈りと行い、愛の実践

さて、本題に戻りますと、私たちは教会で「祈りと行い」の大切さを教えられています。「祈り」のみで終わってはならず、「行い」で愛を実践するように勧められているのです。

パウロのコリントの信徒への手紙（Ⅰ）第13章に、「愛」についての記述があります。曰く、「山を動かすほどの充ちた信仰をもっていても、愛が無ければ無に等しい」。では「愛」とは何か、続いて説明されています。「愛は寛容で、情けあつく、愛は妬まず、誇らず、たかぶらない。非礼を喜ばず、真理の勝利をよろこび、すべてをゆるし、すべてを信じ、すべてを希望し、すべてを耐え忍ぶ」。しかし、よく見てみると、「相手のことをおもんばかる」という精神に触れられていないことが気になるところです。皆さんはどう思われますか。

実は私はかれこれ10年以上、ホームレス支援活動に関わっています。この活動ではアパートの紹介、寝具、食べ物、炊飯器、食器などの提供のほか、困りごとの相談にも携わっています。幸い、この会にはいつの間にか多くのカトリック信徒が参加しています。それは嬉しいことでもあります。私たちは毎週木曜日の夜に街頭で弁当配りをしていますが、配布用の弁当作りには、長崎バプテスト教会、カトリックの飽の浦教会、中町教会、深堀教会の計4教会に協力を頂いています。でも、できればあと一つ二つの教会に参加していただければと願っています。

私は「長崎ホームレスを支援する会」の創立以来、事務局を担当していましたが、前会長の高橋靖子さん（カトリック東長崎教会所属）が退かれた後は私が会長を継ぎました。この会には、ホームページやマスコミに取り上げられたことなどを通じていろいろな方から支援品やご寄付を寄せてもらっています。わが長崎教区からも多額の支援金を頂いており、大変ありがたく思っております。この場を借りて厚くお礼を申し上げたいと思います。

このホームレス支援活動はどれだけ社会の理解を得ているか分かりませんが、少し説明させていただきますと、「ホームレス」とは言うものの、住む家が無いいわゆる「ハウスレス」の人は長崎市内では今ではほんの数名いるか、いないかです。いわゆるリーマンショックという世界的不況が起こった頃2009年に会の活動がスタートしましたが、その時点では各所にホームレスの方々が見られました。まさしく、「ホームレスを支援する会」であったわけです。今では、路上の方からだけでなく家におられる方々からのさまざまな相談もお受けしています。話し相手、相談する人を持たない方々からの相談などもお受けしているわけです。これには傾聴ボランティアという一面もあります。

展望を持って道を開こう

私はかつて、信徒使徒職という言葉で呼ばれる活動に関わったことがありました。教区組織の役員も経験しました。でも今にして思えば、教会内の問題に傾斜した取り組みではなかったろうかと反省させられます。それは外の社会にどれだけ目を向けていたろうかという反省です。そしてまた、5年、10年のスパン（期間）で教会の将来を展望することにも大いに欠けていたように思います。

昨年11月のフランシスコ教皇さまの来崎は私にとっても画期的な体験でした。長崎市民に、そして日本国中にも大きなインパクトを与えたことでしょう。しかしながら、それが一過性の熱気に終わったとすれば大変惜しまれることではないでしょうか。これをきっかけとしてわが長崎教区の前進と良き展望が開けなかったものかと惜しまれてなりません。

でも、今からでも決して遅くはないでしょう。教区組織を挙げてカトリックの、そしてわが長崎教区の展望が描けないものでしょうか。計画し、実践し、反省をもって進めばきっと道が開けるに違いありません。どなたか一緒にやる方はいませんでしょうか。昨年来私はこの思いを抱いていましたが、教区報の紙面を借りてこの呼びかけをさせていただきたいと思います。

お知らせ

〈新しいファックス番号〉
紐差教会のファックス番号が変わりました。
FAX 0950-28-1188

短信

〈新型コロナウイルス感染防止の対応〉
長崎教区では8月20日、新型コロナウイルス感染拡大防止のため「主日ミサの参加義務の免除」を与えることが伝えられていたが、長崎県内における感染状況を鑑み、免除の延長は9月末までで終了した。

感謝

―寄付―
長崎大司教区
●紙村しずよ様（相浦）
故アグネス竹谷ヤエ様の意向として
右の方からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

ぶどう園

※ウイルス感染防止のため、行事への参加に制限があります。詳しくは各小教区のお知らせを最優先にして対応いただき、参加できない方も共にお祈りください。

▼司教座聖堂献堂記念ミサ　11月1日(日)18時30分、浦上教会。

▼大神学院祭2020（インターネットで生配信）　11月3日(火)9時開始予定。テーマ「#STAY WITH CHRIST ―キリストと共に過ごそう！キリストはあなたと共にいる」。詳細は「神学院祭2020特設サイト」。

▼自死された方々のための追悼ミサ　11月7日(土)14時、滑石教会。ゆりの会主催。教区人権委員会協力。問合先・鳥巣シオリ TEL090-9488-7931

▼教区主催追悼ミサ　11月15日(日)13時、相浦教会。

新刊良書

★十戒・主の祈り―教皇講話集
編訳者＝カトリック中央協議会事務局
2018年から19年にかけ行われた「十戒」「主の祈り」をテーマとした連続講話を収録。十戒は神との対話、隷属からの解放である自由への道だと説き、キリスト者の祈りは「アッバ」の一言を心に抱くだけで深められるのだと教える。愛である神と人間の関係についてのカテケージス。カトリック中央協議会、税別800円。

★★★

★みんなでゆきだるま
文＝G・カヴィエゼル
絵＝ロベルタ・パニョーニ
雪がたっぷり積もった日。みんなでゆきだるまをつくると……あれ？ひとりぼっちでさびしそう？「ひとりじゃないよ！」「みんなといっしょ」温かいメッセージが伝わる絵本。ドン・ボスコ社、税別500円。

世界平和へ祈りを…
明治石材
長崎本店　長崎市城栄町13-1
大村店　大村市赤佐古町287番地
HP　http://meijisekizai.shopinfo.jp
業務内容
お墓建立
納骨堂販売
お墓のリフォーム
霊名彫刻
電話（095）846-3598
電話（0957）50-3008

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村勇二
長崎市辻町7-18
24時間営業
TEL（095）844-4011
FAX（095）843-9896

CALIS Catholic Life Service
カリス通信 No.9
火災保険の補償対象となる事故発生時の対応
火災保険では火災だけではなく台風などの自然災害による損害も補償します。水災や地震などは特約を付帯することにより補償の対象となります。
〈事故が起こったら〉事故の大小にかかわらず、まずはカリスまでご連絡をください。その際、『証券番号』もお知らせください。
〈事故報告〉事故報告は証券と共にカリスから郵送している「カトリック火災共済事故報告」用紙をご利用ください。契約によっては事故報告の用紙が同封されていない場合があります。用紙がお手元にない場合はカリスからFAXいたします。事故発生の原因（なぜ）、事故日（いつ）、損害状況（どのように）、をご報告ください。
㊟腐食・カビ・サビなどの老朽化や劣化、自然消耗、雨や雪の単なる吹込み・浸み込み・漏入などは火災保険では支払対象外です。また、地震による火災や倒壊、津波による流失は特約を付帯しないと補償されません。
判断が難しいケースがございますので、まずはカリスまでご相談ください。
〈必要書類〉損傷箇所および原因箇所の写真、修理見積を提出してください。修理見積はFAXでも結構ですが、写真はメールまたは郵送にてご提出ください。修理後の写真や領収証は不要です。
〈保険金支払い〉ご提出いただいた資料に基づき、保険会社にて保険金支払いの可否、支払い金額を算出してカリス経由でお客様にご連絡いたします。支払い金額等、ご了承いただきましたらカリスより保険金請求書を郵送いたしますので、振込先をご記入・ご捺印の上、ご返送ください。
〈注意事項〉
◆必要書類をご提出いただく前に修理をしないでください。
◆写真をご準備いただくにあたり、屋根にのぼる等、危険が伴う場合は修理業者等に依頼してください。
◆「保険が使えるので無料で修理ができる」、「古くなったところも先日の台風のせいにして保険金を請求しちゃいましょう」などと勧誘する業者との建物修理トラブルが発生しています。ご注意ください。
カリスでは事故対応にあたり、親切・丁寧でスピーディーな対応を心がけております。ご質問、ご意見など何なりとお寄せください。
私たちが、お守りいたします。
三條貴英　毛利玲子　杉谷英一
服部秀昭　大水文隆神父（顧問）

カトリック共済システム
有限会社カリス
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館　TEL：03-5632-4449　FAX：03-5632-4468
連絡先 0120-77-0033 http://www.calis.co.jp/
リスク・補償に関して何なりとお気軽にお問い合わせください
19-TC03967

教区評議会 臨時総会

5月に続く2回目の集まり

新型コロナウイルスによる影響下の今年、教区評議会総会が2回に分けて開催された。5月31日（日）の総会は長崎・佐世保（平戸を含む）・上五島・下五島の各地区の会場をテレビ会議方式でつないで進められ、9月の臨時総会の研修テーマも決められた。9月21日（月）は臨時総会がカトリックセンターで開催され、13時から15時30分まで多くの研修が行われた。内容は次の通り。▼長崎県世界遺産課によるキリシタン信心用具調査に関する説明▼小共同体推進室による、祈りとみことばの分かち合い▼福音化推進部からカトリック障害者連絡協議会全国大会in長崎に向けての紹介▼高見三明大司教から教皇訪日を受けた今後の取り組みについての講話▼中村倫明補佐司教から小教区再編成プロジェクトについての説明。

加えて、『カトリック教報』9月号に掲載された「長崎教区の皆様へ お詫びとご報告」について、「教区会計上の重大な不手際」に関する詳細な報告と今後の対応について説明するため、急きょ同日午前11時から時間が設けられた。この件に関して、信徒の方々から事前に電話、ファックス、郵送の形で多数の質問が寄せられていた。それらを整理し、当日は質問を読み上げ、質問に対して関係者が直接答えるという形式をとった。

信徒からは「経緯はよく分かったが、会場参加者の声をもっと聴く時間を取ってほしかった」との声が多かった。そのため質問用紙が配布された。今後は、各地区の評議会や司祭団の声を聴きながら、顧問団で問題解決を図っていくことになる。

教区顧問会

補正予算や会計に関する問題

2020年度第2回教区顧問会が9月15日（火）長崎大司教館で開催され、いくつかの審議・報告事項があった。主な内容は次の通り。

まず、2020年度第2次補正予算が承認された。新型コロナウイルスによる影響で特に大浦天主堂拝観料の大幅減により、教区活動費の再度の見直しが行われた。

続いて、「教区会計上の重大な不手際」に関する問題が話し合われた。（1）投資・貸付問題では、今後の対応、処理の在り方や補填計画について話し合われ、（2）教区会計の今後の在り方の検討では、その透明性と第三者の目から問題点を洗い出し、具体的な会計基準のルール作りを進めていくことを了承した。

報告事項として、駐日教皇大使ジョセフ・チェノットゥ大司教の追悼ミサの実施（9月17日）、長崎大司教区の司祭助祭叙階式（10月11日）、新型コロナウイルス感染拡大に伴い今年4月から延期となっていた司祭の日に祝われる司祭たちのミサ（10月12日）などについて確認された。

先祖が伝えた信仰に感謝し、祈る

十字架山殉教祭

9月13日（日）午後2時から長崎市辻町の十字架山で浦上小教区主催の殉教記念ミサが行われた。当日は髙見三明大司教と中村倫明補佐司教も、浦上教会司祭団と共にミサを司式した。

ミサに先立ち、浦上教会典礼委員長が十字架山の歴史を説明し、「先祖の信仰に倣い、将来に向かって歩み続けることができるようこの聖地を大切に守り、祈りと犠牲で子孫に同じ信仰を伝えていきましょう」と信仰を守り伝えていく決意を述べた。

説教を担当した宮原大地師（浦上教会助任）は、「自分の重荷を背負いここに集まった私たちが、この丘を下っていくとき、重荷は、遣わされていく先へと携えていく希望となります。それは信仰の旅路にとっては神の国への前進です。先祖たちの旅がそうであったように、今日の私たちの帰り道もそのように恵みあふれる派遣の道となりますように願いたいです」と語った。

当日、十字架山には150人余が集まった。たまたま巡礼で訪れたというシスターは「今日が殉教祭の日と知らなかったのでよかった」と話していた。また、初めて殉教祭に参加したという修道会の司祭は「写真と解説を母国へ送るつもりです」と語っていた。

聖トマス西と十五殉教者記念ミサ

9月27日（日）午後5時から中町教会で聖トマス西と十五殉教者記念ミサが行われた。今年は新型コロナウイルス感染対策のため長崎南地区としてではなく中町小教区主催で実施された。

ミサに先立ち、教会敷地内にある殉教者顕彰碑の前に皆が集まった。中村倫明補佐司教は、「この長崎の至福の丘で示された聖トマス西と15殉教者の模範を思い起こしながら、その跡を歩み、強い信仰を持って生きることができるよう、心を合わせ祈りましょう」と呼びかけ、顕彰碑に献花。参加者をロザリオの祈りへと招き、3人の幼稚園児たちがロザリオの先唱をした（写真）。

「16聖人はドミニコ会に関わりがあり、ロザリオの起源が聖ドミニコとされることから、ロザリオの祈りは聖人たちを模範とする人にとって、彼らに近づく大きな道具、そして彼らの殉教を支え続けた聖母マリアにならう素晴らしい手段となってきた」（主任司祭）

聖堂での記念ミサは中村司教の司式で始まり、「聖人たちの殉教を記念するわたしたちに、信じるために必要な謙虚さと信じたことを宣言する勇気をお与えください」と集会祈願がささげられた。「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（マタイ10・22）との福音朗読に続き、中村司教は「殉教者たちは歌っていたと思います。わたしを見ないでください。わたしの背後にいる方を見てください。わたしたちを支えたキリストを見てください。神のひとり子キリストに目を注いでください」と語りかけた。殉教者たちを通して、彼らの苦しみを支えたいつくしみ深い神の愛を見るように諭しながら、参加者にはキリストを証しすることの必要性を説いた。

教皇フランシスコの平和論（3）

「自然を聴く」

長崎教区司祭　山内 清海

2013年3月13日の午後、「5回目の投票で、新教皇フランシスコが誕生し、午後7時6分、白い煙が上がり、鐘が鳴り響き、聖ペトロ広場に集まっていた世界中の人々から拍手と歓声が湧いた」。これはローマ在住の方から送られた当日のイタリアの新聞の冒頭の一節です。さて新教皇が選んだ教皇名は（アッシジの）フランシスコでした。

アッシジの聖フランシスコといえば、おそらくすべての人は、小鳥や動物たちと親しげに談笑している姿のご絵などでお馴染みだと思います が、地球上のすべての被造物を神に創造されたものとして等しく愛した聖人として有名です。新教皇はこの聖人を特別に尊敬し、模倣していたのです。

1「神」と「自然」

ところで歴史上人類は、種々の形式で「自然」に対応してきました。もちろん「自然」を敵視したこともありましたし（創3・17-20参照）、「偶像崇拝の対象」（知13・2参照）として拒否されたこともありました。あるいは中世期の聖トマス・アクィナスのように「神の足跡」として認め、そこから出発して「最高の存在」である神にまで遡る哲学的推理方法に辿りついた人々もいます。しかしキリストはわたしたちに、「自然を観」、「自然を聴く」ことの大切さも教えられました。「（あるときキリストは群衆に、）あなた方に言っておく。命のために何を食べ、何を飲もうか、また体のために何を着ようかと思い煩ってはならない。……空の鳥を見なさい。種蒔きも、刈り入れもせず、また倉に納めることもしない。それなのに、あなた方の天の父はこれを養ってくださる。あなた方は鳥よりも遥かに優れているではないか。あなた方の誰かが思い煩ったからといって、一刻でも寿命を延ばすことができるだろうか。なぜ、着る物のことで思い煩うのか。野のゆりがどのように育つか考えてみなさい。ほねおりも、紡ぎもしない。あなた方に言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなた方に対しては、なおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから、あなた方は『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と思い煩ってはならない。これらはすべて、異邦人が切に求めるものである。あなた方の天の父は、あなた方がこれらのものをみな必要としていることを知っておられる。まず、神の国とその義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな、加えて、あなた方に与えられる。だから、明日のことを思い煩ってはならない。明日のことは明日が思い煩う。その日の苦労はその日だけで十分である」（マタイ6・25-34）。

2 永井隆博士のこと

二人の子供を残して、間もなくこの世を去らなければならない故永井隆博士にとって、孤児として残される二人の子供のことを思うと、死ぬにも死ねない苦悩の種でした。毎晩自分のベットの両脇で、安らかに眠る二人の子供を見下ろしながら苦悩し、一睡もしないまま朝を迎えることも少なくはなかったようです。そのようなある日、飛び立つ順番を待っているかのように、小さな家の庭先の電線に、雀が一列に並んで止まっているのを見て、永井の不安は一掃されます。彼はそこに、神の偉大なみ摂理を実感し、すべての不安を解消できた、と書いています。

自然の声に耳を傾け「神の声を聴く」とはいっても、それは「自然」と「神」を同一視する「汎神論的思想」ではなく、「自然」は神の過去の単なる足跡ではなく、今でも神のみ業を称え、神のみ旨を忠実に生きているという意味でしょう。アッシジの聖フランシスコが小鳥と語らい合っていたといわれるのも、この自然との親しさを意味していたのでしょう。教皇フランシスコが回勅『ラウダート・シ』で、地球汚染について、例えば「自然が悲鳴をあげている」とか、「自然が厳しく咎めている」と表現しているのもおそらく、そのような比喩的意味であることは明白です。

結論

「わたしが地上に平和をもたらすために来たと思ってはならない。わたしが来たのは、平和ではなく剣を投ずるためである」（マタイ10・34）、と仰せられたキリストは、山上の説教では、「平和をもたらす人は幸いである」（マタイ5・9）、とも教えられました。「平和をもたらす人」は、「平和のために働く人」とも翻訳されます。そして「平和のために働く人」について アッシジの聖フランシスコは、「キリストの道具として働く人」と呼んでいます。ここで「道具」という言葉の深い意味を正しく理解できれば、わたしたちはきっと、平和への理解と愛を深め、より熱心に行動できるでしょう。フランシスコ教皇は今回の日本訪問に際して、長崎・爆心地で語った「核兵器についてのメッセージ」の結論として、生涯の大恩人であるこのアッシジの聖フランシスコの「平和の祈り」を唱えられたのには（『教皇フランシスコ訪日講話集』21-22頁参照）、そのような熱い期待が秘められていたのではないでしょうか。

（おわり）

田平教会で海岸清掃

すべてのいのちを守るための取り組み

9月13日（日）田平教会（中田輝次主任司祭）では、9時のミサ後に21人の信徒・修道者らが海岸清掃を実施した。この活動は当初「被造物を大切にする世界祈願日」（今年は9月6日）に合わせ予定されていたが、台風の影響により1週間後に行われた。

清掃をした海岸は、かつて先祖たちが佐賀で焼かれたとされるレンガを船で荷揚げし、そこから大人も子どもも背負子（しょいこ）にレンガを背負い、教会まで運び上げた浜だという。台風9号で大しけとなった海が打ち寄せたゴミは、木片、プラスチック、ペットボトル、中には砂とゴミが絡み合った化学繊維の漁網まであり、それらを分別、回収した。

参加者は、「教会建設の足がかりとなった海岸。ゴミが砕けて平戸瀬戸の魚が汚染されれば、人間にも影響がある。ぜひ来年も『すべてのいのちを守るための月間』に、海岸清掃活動を通して小さないのちにも配慮する心を（自分たちの中で）育てたい」と語った。

CHI NI WA ODAYAKA

（地には おだやか）

アメリカの信徒からの手紙と詩

被爆75年にあたる今年の7月、米国メリーランド州ボルチモア市在住のカトリック信徒、ゲイブリエル・ブランシャードさんから広島教区と長崎教区にあてて手紙と自作の詩が届いた。

「高見大司教様、白浜司教様、そして日本の皆様、突然のお手紙をお送りしたことご無礼をお許しください」との言葉に始まる手紙には、原爆投下に対する一アメリカ人としてのお詫びと、日本に生まれ数年間を日本で過ごし、家族皆が日本の人々と文化を愛していることなどが綴られている。詩の表題は「CHI NI WA ODAYAKA（地にはおだやか）。「これは、悔い改めと、亡くなられた方々への祈りの詩です」（ブランシャード氏）

高見大司教は、「『多くの方に読んでほしい』というご本人の了解を得て、手紙と詩を教区ホームページに掲載する形で皆様にご紹介いたします。詩には説明をつけていただいています。どうぞお読みになり、平和を願い求める思いを共有していただけたらと思います」と語っている。全文はこの10月、長崎教区ホームページで公開した。

みことばにふれて 174

稲田 伸也 神父

（長崎教区司祭、ローマ在住）

「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。」（マタイ7章3節）

時が経つのは早いもので、イタリアに来て2年半が過ぎました。司祭になる前も、なってからも、まさか自分がイタリアに巡礼や観光以外で来るとは思ってもいませんでした。まして100名を超す司祭、それも世界各地の司祭と共同生活を送ることになるとは想像もしていませんでした。

世界中の司祭と共に祈り、共に生活をすることは、さまざまな社会や文化、教会事情などを知ることができ、人として、また司祭として成長する上で大変有意義なものです。その反面、司祭も人間である以上、残念ながら文化の違いや異国の地で生活しているストレスなどから、意図的ではないにしても、問題を起こしてしまうことがあります。そんな時、ついつい、私は問題を起こした人の悪い点や欠点にばかり目がいってしまい、その人の文句を言ってしまいます。もちろん、私自身が当事者であれば反省するのですが、そうではない場合、相手の文句を言う傾向はより強くなってしまいます。しかし、よくよく私自身の生活を振り返ってみると、文句を言っている相手と同じような事、あるいはそれ以上の事を私自身が行っている事実が見えてきます。そんな時、「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」というみ言葉が特別な重さをもって私の心に響いてきます。

相手の欠点を見て、ただ相手の文句を言うことは、決して自らの成長にはつながりません。なぜならそれは、自らはある所で成長を止めたまま、相手に文句を言っているに過ぎないからです。また同時に、単に相手の文句を言って悪評を広めることは、共同体を壊すだけで成長させることはありません。

人の欠点が目に付く時、先述のみ言葉を思い出し、自分の事を棚に上げ、相手の文句を言うことに専念せず、自身の生活を見つめ直し、自らが成長する機会としたいものです。同時に、同じイエス様を信じる者として、愛のうちに文句を言いたい相手に寄り添い、文句ではなく助言によって相手の成長を助け、自らと相手を含めた共同体全体を、神様の望む姿へと成長させる機会としていきたいものです。

「元気ですかぁ～?!」

教区召命委員会　岡 秋美

教区召命委員会ではコロナ禍により活動自粛を余儀なくされていることから、これまでの活動を振り返りながら、新たな取り組みに挑戦しています。

その一つが、インターネットの活用です。それは、委員会活動は子どもたちや家族、また、青年など若い年代を対象とすることが多いことから、彼らが用いやすいラインやフェイスブックなどの電子媒体を活用し、教会への関心を持ってもらうことにしました。そのために、これまでの開催記録を使い、8月に高校生召命キャンプと青年召命巡礼ウオーク、9月には召命親子キャンプを動画配信して「コロナに負けないで」の応援メッセージとし、教会と信徒を繋ぐ懸け橋としています。

二つ目が、ホームページの活用です。ただ、委員会独自のホームページを作ることが目的ではありません。教区広報委員会・教区家庭委員会などと協力しながら、既存のホームページのコーナーに召命委員会活動の趣旨などもご覧いただけるようにして諸委員会と連携をとり、より多くの人々に関心を持っていただけるように考えています。皆さんにはそれぞれの関心事を分かち合っていただき、広げていただければ幸いです。

教区召命委員会の活動をまとめた動画は、「長崎教区家庭委員会」で検索し、同サイトのメニューの中の「若者たちへ」で閲覧できます。この他に、「お家で教会学校」や「子どもたちへ」にも動画が掲載されています。いずれもぜひご覧ください。

アウグスティヌス 長山武一 神父

（神言修道会）

8月20日（現地時間）ブラジル・サンパウロ州タピライ市で逝去。78歳。

1941年新上五島町生まれ。65年初誓願。70年終生誓願、同年10月10日司祭叙階。その後、ブラジルに派遣された。93年日本で神学生養成担当者として奉仕。94年ブラジルに戻り、宣教師として司牧した。帰国の際も、ふるさと曽根教会の信徒に気さくに声を掛けていた。分け隔てなく、素朴で純粋な心で人と接し、愛される存在だった。

ブラジルでの葬儀ミサは新型コロナウイルスの影響下、参列できない方々のためにテレビ中継され、2人の司教、21人の司祭が見送った。親族は「信徒の皆様をはじめ、ブラジル中央管区の神言会兄弟会員の皆様に愛していただき、最後も見送っていただいて深く感謝しています」と語った。

今年は金祝にあたり5月に帰国する予定だったが、コロナ禍のため叶わなかった。生前からの本人の希望により、安住の地、タピライ市営墓地に埋葬された。

エンマヌエル・マリー 加藤美枝子修道女

（厳律至聖贖罪主女子修道会）

8月30日、入院していた千葉県の病院で老衰のため逝去。89歳。

1960年5月8日入会。63年10月2日初誓願、68年8月25日終生誓願。修道生活57年。

外務修道女として幼稚園の保母、教諭の免許を持ち、幼稚園で長年勤めた。園児とその両親に神の愛といつくしみを伝えるため励み、努めていた。祈りと仕事にもとても熱心で、姉妹たちに奉仕していた。後年、病を得て長年治療を続けていた。

葬儀ミサは9月3日、レデンプトリスチン長崎修道院で行われた。

マリア 狩浦マシ修道女

（お告げのマリア修道会）

9月24日逝去。107歳。1913年五島市生まれ。33年水ノ浦修道院に入会。57年初誓願、63年終生誓願宣立。

シスター狩浦は入会して40年後に初めての転任を体験し、大司教館、黒崎、太田尾の司祭館や施設で調理業務に携わったが、生涯のほとんどを水ノ浦修道院で過ごした。80歳を過ぎても修道院敷地の十字架山を四季折々の美しい花で飾り、巡礼者を楽しませた。103歳で施設に入所するまで、電話の受付、お祈り係として、共同体の使徒職を支え、院内の整理や、姉妹への心配りに務めた。100歳まで杖もつかず、心身共に健康、記憶力も抜群で姉妹たちの頼りとなった。

葬儀ミサ・告別式は9月26日、水ノ浦教会で行われた。

長崎教区家庭委員会からのお知らせ

2021年カレンダー「ともにあゆむ」

現在、販売中。各教会で取り纏めの上、教区家庭委員会へお申し込みください（Fax095・842・4460）。1冊、税込800円。送料・振込手数料は別。カトリックセンターでも購入可。お問い合わせは（TEL095・842・4450）担当・辻まで。

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268

長崎カトリックセンター前 長崎市上野町1-5 TEL 095-845-6175
医療法人 平田クリニック
院長 ヨゼフ 平田哲也
内科・循環器科・入院可
通所リハビリテーションあり

主の平安
株式会社 五島式典社（斎場） 五島中央会館 奈留会館
代表取締役 ヨゼフ 浦 昭
24時間営業
五島市上大津町 1385 番地 1 TEL (0959) 74－5551 FAX (0959) 74－5552
五島市奈留町浦 1899－1 TEL (0959) 64－3101 FAX (0959) 64－3102

石碑
文字彫刻
墓地工事
リフォーム
墓地分譲
ながさきせきちょう
長崎石彫
ヨゼフ 岩永 博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町 6-17 岩永ビル